

第43回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■小学校5年生の部 最優秀賞 大切な人と一緒にいられる毎日 弟子屈小学校 佐々木心優さん



私は昔の事にとっても興味があり、特に戦争についてはその時代をもちろん知らないのでも、どんな事が起きていたのか、どんな生活をしていたのかを知りたくて日頃からよく本を読んでいます。この本も図書館ですぐ目に止まり読むことができました。

昭和二十年八月六日、アメリカが広島に原爆を投下しました。この本に登場する人達はみんな広島原爆で大切な人を失ってしまった人達です。広島では8月になると灯籠流しが行われます。戦争で亡くなった人への慰霊で名前を書いた灯籠を流します。

主人公の希末の母も毎年二つの灯籠を流していました。だけど一つには名前が書いていないのを希末はいつも不思議に思っていました。

実は、一つは父と母が結婚する前の奥さん。きのご雲の下で亡くなった方でした。名前のないもう一つは父と結婚する前、母の大切な人の方だったのです。その人もこの戦争で亡くなったのです。

爆弾でのご雲の下にいた七万人もの人達の命が奪われました。でも、爆弾だけではなく、目に見えない放射線で命が奪われる人もいて、今もその苦しみと闘っている人がいます。

爆心地では地表温度が四千度で血は煮え、肉が溶けて人は消えてしまったのです。そんな事が本当にあるのかとどれだけ考えても信じられないほどおそろしいです。

ある時、学校の先生の澄子さんが、焼け跡で一人の生徒を背負い五人を抱きかかえた姿の骨が発見されました。私だったらと思うと、そんな勇氣はないし、すごい人だったのだなあと思いました。

もし自分の大切な家族がきのご雲の下で亡くなってしまえば、一人ぼっちになってしまったらと考えると、爆弾を落とす敵を心の底からうらむかもしれない。そして、どこかで生きているかもしれないと探し回ったり、受け止められず生きる力がなくなるかもしれない。

私が生きている今は、戦争はありません。毎日大切な家族と当たり前の様にごはんが食べられて笑い合えて学校で勉強したり、友達と遊べたりしています。戦争でたくさんの方の命を奪い、戦争が終わっても残された人の心を傷つけたので、戦争は絶対に起こらないでほしいです。

私は、戦争がいつ起こるか分からない時代に生きています。だからこそ大切な人と一緒にいられる毎日を大事にして後悔しないようにしたいと思いました。本のタイトル「光の写し絵」とは絵の意味もあるけど、大切な姿をえがいたり写したりしたもののことだと思います。私は大切な人達の絵を描くことが好きです。これからも描き続けていこうと思います。大

切な人を心にいつも写していきたいのです。
そして、本にあった
『生かされたなら、生きるといけん。どんなに(ごん)な(ごん)つろつても、お迎えが来るまでは生きるといけん(ごん)のじゃ』
という言葉に胸にきざんで…。

書名

『光のうつしえ』
廣島 ヒロシマ 広島
朽木 祥 作

(寸評)

この本から戦争の凄惨さを感じ、戦争について訴えかける感想文になっています。しかし、凄惨さを訴えるだけではなく、自分の生活を振り返り、前向きな未来に向かっての「想い」が書かれています。「きっかけ」あらずじ↓感想↓まとめ」と文章の構成もすっきりしており、非常に素晴らしい作品になっています。



■小学校6年生の部 最優秀賞 自由について 川湯小学校 島津 佳歩さん



私が、最初にこの本を見た時に、表紙の少年の絵の横に小さく、「We love freedom」と

書かれていたのを見つけました。その意味が気になり調べてみると、「私たちは、自由を愛する」でした。この本を一度読み、再度表紙の言葉を見ると、その意味に納得することができました。

この本には、選挙で勝利した健康健全党が、チヨコレート、砂糖および添加物禁止法を発令します。この法律は、チヨコレートや砂糖などを全面的に禁止するという内容でした。この法律を破ると、牢獄に入れられ、「再教育」をされることとなります。この法律を改正させるために主人公の少年たちは立ち上がり、最後には、地下にチヨコレートバーを作ったり、革命を起したりして、社会を変えていくという内容が書かれています。

私は、この本に書かれている法律を最初に読んだときに、もし、この世界に自分がいたらどうするのだろうかと考えました。私は、おそらく、法律なので健康健全党に本当はいやでも従ってしまうのではないかと思いました。

ですから、主人公たちの自分が正しいと思ったことを行っていく自由な姿が、とても素晴らしいと思いました。

そして、もう一つ。この本を読んで考えたことは、選択の自由です。この本で、大人たちは、健康健全党を選ぶか選ばないかの選択の自由がありました。ですが、多くの大人が、「自分の一票では何も変わらない」と選挙に行かず、選択の自由を捨てました。政治に無関心な人々が増えたのです。

私は、このことを、不思議に感じました。なぜなら、私だったら、自分が住んでいる国が、どうなっていくのか、どのような人が政治をするか知りたくなるからです。

しかし、こうした選択の自由を捨てるということは、実際に、私たちの身の回りでも起こっています。私は、選択の自由を行使するために18歳になったり、必ず選挙に行き、選択の自由を行使したいと思いました。

この本を読み終えた時に、私は、表紙に「BOOTEIG」と書かれてあるのを見つけてきました。これは、この本の原題で、密売・密造という意味があります。これは、主人公たちのことだと思いました。地下にチヨコレートバーを立て、チヨコレートを作ることは、法律で禁止されているのです。私は、今まで、主人公たちの目線でした。私は、今まで、主人公たちの目線から見て、こんなにも主人公たちの自由は悪いことになるのかと、とても驚きました。

しかし、よく考えると、このようにことは日常生活の中にもよくあることに気が付きました。例えば、喧嘩が起きてしまった時、自分は相手が悪いと思っ

いても、相手は、私が悪いと思っただけのことがあります。他にも、人のことを良く言ったり、悪く言ったりすることもあろうでしょう。立場を変えてみることで、同じものでも違う見え方になります。これから生活していく中でも、気を付けなければならぬと思います。

最後に、この本には、「私たちは自由を愛する」というテーマが根底にあり、それをチヨコレートの物語に包んで表現していると感じました。ですが、その自由とは、立場により正義の解釈が変わるなど、何をもちつて自由とするのかを考えさせられる話でした。

書名

『チヨコレート・アンダーグラウンド』
アレックス シハラ 著

(寸評)

千五百文字ほどの感想文を読むだけで、この本がどのような話なのかわかるくらい、すっきりとまとめられている作品でした。読書しながら本の中に自分を投影し、「自分なら…」「自分の生活なら…」と本の世界に入りつつも自身の生活への振り返りができている点も素晴らしい感想文です。作品への愛情を強く感じることができると感じました。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。

※児童の学年は、コンクールが行われた平成29年度当時のものです。